朝日小学生新聞 2023年11月15日

子どもたちに 自由に動く喜びと笑顔を

海外に子ども用車椅子を送る会の会長 ▶ 森田祐和さん

日本で使われなくなった子ども用の車いすを集めて、海外の子どもたちに届ける活動を20年ほど続けている森田祐和さん（64歳）。今年10月現在で26か国に9515台を送りました。「車いすを使って自由に動く喜びを感じてほしい」といいます。　（前田奈津子）

森田さんが会長を務めるＮＰＯ法人「海外に子ども用車椅子を送る会」は、マレーシアやフィリピン、エチオピアなど、さまざまな国に車いすを送っています。去年、ロシアが攻め入ったウクライナにも届けています。危険な状況が続くウクライナでは、移動の手段である車いすが求められています。

東京都福生市で貸衣装の店を営む森田さんが、会をつくったのは2004年。大きな病気にかかり、「次の世代に何かを残したい」と思ったことがきっかけでした。森田さんには障がいがある息子がいて、子どものときに使っていた車いすを保管していました。これを活用しようと思い立ちます。車いすの新品は10万～30万円ほど。自治体から補助金が出ますが、子どもの成長に合わせて３～４年で買いかえなければなりません。「まだ使えるのに、捨てるのはもったいないと思っていました」とふり返ります。

会を立ち上げると、協力してくれる人や会社といっしょに車いすを集め、海外へ送る活動を始めました。集まった車いすはきれいにそうじして、不具合がないかなどを点検します。

車いすを届けた国を訪ねることもあります。印象に残っているのがエチオピアの子どもです。車いすがないため、自由に動けませんでした。学校にも通っていないようでした。その子の一番の願いは「木の下で過ごすこと」でした。

日本から送った車いすに乗るアフリカの子ども
海外に子ども用車椅子を送る会提供

「車いすがあれば、好きなときに外に出られます」と森田さん。長く使ってもらうため、現地の人に、修理や整備の指導もしています。

ＮＰＯ法人「海外に子ども用車椅子を送る会」　障がいのある子どもたちの健やかな成長を支援し、住みやすい社会にすることなどを目的とする。2004年に発足し、06年にＮＰＯ法人となった。車いすの届け先は相手国の赤十字社や政府、公共団体など。年に数回、船便で送る。

森田祐和さんを知るための質問

いまがわかる

Q1 好きなものは？

車など乗り物が好きです。旅行に出かけるのも楽しみの一つです。さまざまな出会いがあるし、その土地の文化にもふれられるからです。観光名所をまわるより、できるだけ地元の人のふだんの暮らしがわかるような場所に行くようにします。旅先で感じたことは、長い年月がたっても記憶に残っています。

Q2 子どものころの思い出は？

家では、レース鳩（伝書鳩）を飼っていました。ウサギやインコなど、生き物に興味がありました。本を読むのも好きでした。

Q3 海外へ送る前の車いすの清掃などは、だれがしているの？

「海外に子ども用車椅子を送る会」のメンバーだけでなく、大学生や会社員もボランティアで参加しています。日本で暮らすベトナム人といった外国の人たちが加わることもあります。みなさん、熱心に作業してくれるので助かっています。年齢や出身もちがう人の交流の場にもなっています。

Q4 車いすを送る活動を長く続けられる理由は？

子どもたちの笑顔が見られることです。送った先で、車いすを使う子どもたちの様子を目にすると「もっとがんばろう」という気持ちになります。車いすを海外に送るためには、活動に協力してくれる人たちや、輸送費などのお金が必要です。相手の国とのやりとりがうまくいかないこともあります。それでも、続けることが大切だと考えています。

Q6 子どもたちに伝えたいことは？

この記事を通して、車いすが必要な子どもたちがたくさんいることを知ってほしいと思います。そして「家から出られない日が何年も続いたら、どんな気持ちになるだろう」「自由に移動できなかったら、どのような不便があるだろう」「車いすがあったら、どんなことができるだろう」などと考えてみてください。